

《相模国分寺跡クイズ解説》

- 1 国分寺・国分尼寺は、奈良時代に聖武天皇が国ごとに建てさせた寺院です。当時、日照り・地震などの天災や飢きん、伝染病、貴族の反乱などに苦しむことが多かったので、仏教の力で国家がやすらかにおさまるようにと、天平13(741)年、聖武天皇が詔をだして国分寺を建てさせました。国分寺は僧寺、国分尼寺は尼寺で、それぞれの正式名称は、国分寺は「金光明四天王護国之寺」、国分尼寺は「法華滅罪之寺」といいました。国分寺の僧(お坊さん)は20名、国分尼寺の尼は10名と決められていました。国分寺は68か国に建てられました。①
- 2 国分寺建立の詔では、国分寺を建てる場所として、「人家から遠からず、近からず、良い場所を選ばなければならない」とされています。相模国では現在の海老名市が選ばれました。③
- 3 塔跡からはたくさんの瓦片などが出土しています。中には軒丸瓦・軒平瓦水煙の断片もあり、焼けた瓦片も見つかっていることから、塔は焼失したと考えられています。塔跡からは五葉単弁蓮華文軒丸瓦が出土しています。③
- 4 写真は「金銅製水煙」で、発掘調査で塔跡の脇から出土しました。表面の金が残っている保存状態の良いもので全国的に見ても事例のほとんどないものです。水煙は、塔の先端に取り付けられた飾りの一部で、火炎を表現したものが、火災を避ける意味で「水煙」と呼ばれています。②
- 5 塔跡には、高さ約1.35mの基壇の上に17個のうち10個の礎石が現存しています。この礎石の間隔から高さ約65mの「七重塔」が建っていたと推定されます。基壇は、建物の重さに耐えられるように、地面を一度掘り下げた後、丹念に土をつき固めて造られています。③